

太陽の子アナトール

## 太陽の子アナトール

——「太陽神話」としての『アナトールの墓』——

馬 越 洋 平

### はじめに

マラルメが八歳で夭折した息子アナトールのために書いた覚書は、『アナトールの墓』と題され、ジャン＝ピエール・リシャールの大きな序文がつけられて出版された。そのなかでリシャールは、アナトールの死が「自然」の様々な要素（太陽、大地、風、川、花など）のなかで語られていることの重要性を主張した。ベルトラン・マルシャルはアナトールの死と「自然」のテーマについての考察を深め、そこにマラルメの神話学『古代の神々』のテーマである「自然の悲劇」を読み取った<sup>(1)</sup>。『古代の神々』はジョージ・コックスの『神話学提要』を原著としこれをマラルメが翻訳したものであるが、奇しくも『古代の神々』の出版が計画されてから出版されるまでの期間は、一八七一年に生まれ一八七九年の秋に死んだアナトールの生涯と完全に重なるのである。したがって『アナトールの墓』には、『古代の神々』の思想が濃厚に反映されており、マルシャルの研究のように、「自然の悲劇」というテーマから読み解く必要があるテキストなのである。

本論では、マルシャルや同様の問題意識をもって『アナトールの墓』の註解を試みた竹内信夫氏の研究を参照しつつ、「自然の悲劇」のテーマから『アナトールの墓』を再度読み解いてみたい。特に本論では「自然の悲劇」の英雄が「太陽」であるということにこだわりたい。まずアナトールが、書簡や覚書のなかで「太陽」の化身として語られていることを確認する。そのあとで「自然の悲劇」の英雄が「太陽」であることによって生まれる「光と闇の闘い」や「運命」というテーマに沿ってこの覚書を読解する。『アナトールの墓』は、これらのテーマのもと書かれていると思われるからである。最後にアナトールが、「太陽」の英雄として後のマラルメの作品のなかで再生する場面を目撃しよう。すなわち本論は『アナトールの墓』を「太陽神話」として語る試みと言える。

### 第一章「太陽の子アナトール」

ここではアナトールが「自然の悲劇」の英雄である「太陽」に見立てられてゆくところから確認してみよう。

アナトールは一八七九年の春ごろから重い関節リウマチに陥っていたが、マルシャルが主張す

るように、マラルメは、深刻化するアナトールの病状を自然現象と重ねて語った。マラルメは、療養のためにアナトールを連れてフォンテーヌブロー近郊のヴァルヴァンへ行くのだが、森林を見て機嫌がよくなったアナトールの様子を次のように示す、「(アナトールは) ひとりでにこう言った、『ぼくもう病気なんかじゃないよ！』と。しかしこの喜びは、いい天気同様、長くは続かなかった。』<sup>(2)</sup>(八月一七日または一八日カザリス宛)。また、九月の療養地からの手紙でも同様である、「(アナトールの症状は) 時には、その日ごとの天気と並行して、あるいは、偶然に、いい日々があり、悪い日々があるのです。』<sup>(3)</sup>(九月一六日カザリス宛)。

このようにマラルメは、アナトール病状を天候の様子と対応させて語るものであり、常にアナトールは「自然」全体と結びついて眺められているのである。また一方でマラルメは、カザリス宛の書簡に見る通り、「自然の奇跡」<sup>(4)</sup>以外にアナトールを癒すものはないのだと訴え「自然」の恩寵にすがろうとしているのである。このような「自然」に対するマラルメの態度は、一八六〇年代後半に精神的危機によって失った父なる「神 le Dieu」の代わりに母なる「自然 la Nature」に救いを求めていると理解することもできるが<sup>(5)</sup>、それだけに還元できるものではない。マラルメの「自然」の観念は、アナトールの病状が深刻化するにつれて、一八七〇年代のマラルメの神話学のテーマ「自然の悲劇」と深く結びついていることが明らかとなってくる。

アナトールの生死の境をさまよう様子を「自然の悲劇」として捉えていることを最も強く印象づける書簡は、八月二二日のアンリ・ルージョン宛に送られた書簡である。マラルメは、ますます悪化してゆくアナトールの病状を伝えるのに「生と死の闘い」という言葉を使っているのである。

Mon bon ami

Je n'ose point donner de nouvelles parce qu'il y a des minutes, dans **ce combat entre la vie et la mort**, que soutient notre pauvre petit adoré, où j'espère, et me repens d'une lettre trop triste écrite l'instant d'avant, comme de quelque courtier de malheur par moi-même dépêché. Je ne sais plus et ne vois rien, du reste, tant j'ai observé avec des émotions contraires.<sup>(6)</sup>

親愛なる友よ

私は便りを出す気になれません。なぜなら私たちの哀れで可愛い坊やが続けている**生と死の闘い**のあいま、希望を持ちつつも、少し前に書いたあまりに悲しい手紙を後悔することがあるからです。それは私自身が急いで送った不幸を周旋する手紙のようなのです。私はもう途方に暮れ、なにも分かりません、ただ相反する感情をもって多くを見守ってきたのです。

(強調著者)

この書簡に見られるアナトールの「生と死の闘い」という表現に、次に引用する「自然の悲劇」のテーマ、「光と闇の闘い」が反映されていることは疑いえない。

*Tel est, avec le changement des Saisons, la naissance de la Nature au printemps, sa plénitude estivale de vie et sa mort en automne, enfin sa dispartion totale pendant l'hiver (phases qui correspondent au lever, à midi, au coucher, à la nuit), le grand et perpétuel sujet de la Mythoplogie: la double evolution solaire, quotidienne et annuelle. Rapprochés par leur ressemblance et souvent confondus pour la plupart dans un seul des traits principaux qui retracent **la lutte de la lumière et l'ombre**, les dieux et les héros deviennent tous, pour la science, les acteurs de ce grand et pur spectacle, dans la grandeur et la pureté duquel ils s'épanouissent bientôt à nos yeux, lequel est: LA TRAGÉDIE DE LA NATURE.*<sup>(7)</sup>

一日と一年の太陽の二重の変動、季節の変動によってもたらされる、春における自然の誕生、夏の生命の完全さ、秋における死、冬における完全な消滅、これらは日の出、正午、日没、夜に対応している。これが神話学の大きな永遠の主題なのです。神々と英雄たちは、類似性によって引き寄せられて、**光と闇の闘い**を語る主要なる特徴のただ一つのなかに、大部分がしばしば一体となって、科学からみれば、この偉大なる純粋なスペクタクルの俳優たちとなるのです。我々の眼からすれば彼らは偉大さと純粋さのなかにやがて消え去るのです。そのスペクタクルが〈自然の悲劇〉です。

(強調著者)

マラルメがコックスから学んだ「比較神話学」とは、人格化された古代の神々を知的な操作によって、日没、夜明けなど、様々な自然現象へと還元することである。最終的に古代の神々や英雄たち、すなわち神話の登場人物はすべて、日々と一年のなかで「光と闇の闘い」を繰り返す「太陽」という唯一の英雄に還元されるのである。

マラルメは、アナトールの闘病とその死を自らの神話学のテーマ「自然の悲劇」でもって理解し、その主人公である「太陽」に息子を見立てるのである。アナトールの死を記した覚書はそれをよく物語っている。

(M4)

malade au printemps mort en automne — c'est le soleil la vague idée la toux<sup>(8)</sup>

病んだのは春 死んだのは秋 ―この子は太陽だ 波 観念 咳

(M61)

Soleil couché et vent

or parti, et vent de rien qui souffle (là, le néant moderne) ?<sup>(9)</sup>

沈んだ太陽 風

消え去った黄金、そして空無の風が吹く（そこに現代の虚無がある）？

紙片四では、アナトールが、「太陽」の死の季節である秋に亡くなったことを簡潔に表現し、アナトールがまさに「太陽」の化身であったことを歌っている。紙片六一では、再びアナトールの死を思わせる「日没 Soleil couché」が描かれ、虚無の風がその後を吹き抜けてゆく。さらに紙片六一では「日没」は「消え去った黄金 or parti」と言い換えられているが、これはマラルメが先にあげた書簡の中で「太陽神話」である『古代の神々』を「黄金についての書物 le livre sur l'or」<sup>(10)</sup>と呼んでいることと反響しあっている。「太陽」という「黄金 l'or」を中心にして、『アナトールの墓』と『古代の神々』の世界とが通底しているのである。このように、アナトールはマラルメの神話的世界の主人公「太陽」となるのである。

最後にアナトールが亡くなったあとの、マラルメ一家の様子を伝える書簡を引用して本章を終えよう。

Toutes ces heures de fête qui terminent l'année sont pour nous cruelles, ainsi que vous pouvez le penser; l'absence de l'être, qui fut la flamme et la joie de la maison, nous glace, comme le ferait le froid du dehors qui sévit aux carreaux.<sup>(11)</sup>

御分りでしょうが、一年を締めくくる祝日のどんな時間も私たちにとっては、残酷なものです。この家の炎であり喜びであった者の不在は、窓ガラスに猛威を振るう戸外の冷気がそうするように、私たちを凍りつけているのです。

（一八七九年、一二月二十四日、ジョン・H・イングラム宛）

一家の「太陽」であった息子の死のあとに、悲しみに凍てついた「太陽」の消滅の季節がやってきたのである。この書簡からも明らかなように、生前、死、死後まで、マラルメは、アナトールを、「太陽」のイメージをもって語っているのである。

## 第二章「光と闇の闘い」

「自然の悲劇」とは「太陽」が繰り広げる「光と闇の闘い」の劇である。『アナトールの墓』ではそれは、紙片四と紙片六一で見たように日没のなかに象徴的に描かれていた。『古代の神々』でみられるように「太陽」が繰り広げるこの闘いの劇は、様々な神話の英雄譚として語られてきた。「自然の悲劇」の英雄である「太陽」にアナトールを見立てているこの覚書は、「光と闇の闘い」<sup>(12)</sup>のテーマが流れているはずであり、「太陽」が繰り広げる「光と闇の闘い」に対応するように、この覚書の主人公アナトールも、英雄的な闘いを演じる者として造形されていると思われるのである。本章では「光と闇の闘い」のテーマでもってこの覚書を読み解き、そのテーマのなかでアナトールが神話的英雄として造形されていることを明らかにしたい。

『アナトールの墓』のなかで「光と闇の闘い」は、先の書簡の「生と死の闘い」という言葉から分かるように、アナトールと「死」の闘いとして展開される。マラルメは神話的想像力によって、アナトールを「死」という敵と闘う「英雄」として造形してゆく。「死との闘い」は覚書のなかで「病との闘い」（紙片二〇五）とも言い換えられるが、「死」が定着した最初の日から子供は「病の刻印」（紙片二一）を受けていたと語られており、「病」と「死」は分かつことができない。したがって「死」と「病」は生きようとするアナトールの敵対者という意味というでは同一のものとして考えられる（紙片三八）。

そして両者ともアナトールの命を狙う敵として擬人化されている。「英雄」の闘う敵のように意志を持った存在として描かれているのである。幼い身でありながら生きるために必死に闘うアナトールは、「死の卑劣な一撃」（紙片三八）にあって死んでゆく。それも「何も知らないうちに」（紙片三八）死ぬのだ。次に引用する紙片に見るアナトールが子供であるがゆえに自らを死ぬなどと思っていなかった事実は、『アナトールの墓』において繰り返される重要なテーマの一つである。

(M63, 64)

la Mort – chuchote bas – je ne suis personne – je m'ignore même (car morts ne savent pas qu'ils sont morts –, ni même qu'ils meurent – pour enfants du moins – ou héros – morts soudaines [...])<sup>(13)</sup>

〈死〉は一低くささやく—私は何者でもない—私は自分を知らない（というのも死者たちは死んでいるということも知らないのだから—死んでゆくということすら知らない—少なくとも子供たちにとっては—あるいは英雄たち—突然死 [...]

子供の死はリシャールが述べているように<sup>(14)</sup>、「あまりにも無垢で、あまりにも突然死ぬ」という事実によって「英雄」の死と同一視されるのである。病床のアナトールの死は、マラルメによって戦場での英雄的な死に移し変えられるのである。このような英雄的な死は、紙片一八八では大航海の最中に波にさらわれた船乗りの死として表現される、「小さな船乗り—制服を着てなんだって！—大航海のなかで波がお前をさらっていった 海、腹水」。アナトールが船乗りの恰好をして棺に納められたことや、病状が悪化し「腹水 ascite」がたまっていたことが、神話的光景の中に移し変えられて、海水をたくさん飲んで死んだ船乗りのイメージを形作るのである。

このように英雄アナトールは、その闘いのなかで死んでしまったのである。英雄アナトールの「死」との闘いと、その結果アナトールに訪れた「死」が、先に言及したように、紙片四、紙片六一でみた、沈んでいった秋の「太陽」が繰り広げていた「光と闇の闘い」のなかに表現されていたことは言うまでもない。

しかしマラルメは、英雄アナトールは、死に敗北したのではなく、勝利したものとしてこの神話テキストをまとめてゆく。これはマラルメという「天才」と「死」の闘いでもあるのだ（紙片八二）。それは「詩—思考」（紙片一三〇）の力によってなされる。マラルメは「死」の力をあらゆる形で否定する。マラルメはまず、「死」はそれを意識しない者にとっては存在しないものであり、何も知らないまま死んでいったアナトールには「死」は無力なのだと語る（紙片七九）。

そしてなにより、マラルメは、むしろ「死」を「生の重み」という個別的存在からの解放の瞬間として捉え、アナトールは「死」に勝利したのではないかと語る（紙片一七一）。アナトールの神聖な「純粹精神 l'esprit pur」<sup>(15)</sup>が、その束縛である「肉体」から解放され、マラルメのなかで生き続けるのである（紙片一六六、一六七、一六八）。

マラルメは最終的に、次の紙片で見るように、アナトールを「死」という敵に打ち勝ったまばゆい「英雄」として描きだす。

(M76, 77)

ne pas le sentir sur mes genoux, assis, rêveur causant avec lui, cela fait qu'ils se débent et que je me suis agenouillé — non plus devant l'enfant familier etc. — alors, avec sa veste — (marin ?) mais devant le jeune dieu, héros, sacré par mort —<sup>(16)</sup>

座って夢をみる彼と語りつつ、でも膝の上に彼を感じないから、膝が崩れ落ちる、そうして私は跪いたのだ—慣れ親しんだあの子の前ではない 等々—あのときは、彼は上着を着て—（船乗りの？）—そうではなく、若い神、死によって聖別された英雄の前で—

アナトールは「死」の攻撃によって命を落としたものの、それはアナトールの個別的存在を拭き去ることではなく、息子の「純粹精神」は、むしろ完全に姿を現すのである。アナトールという「英雄」は、「死」によって聖別されて「若き神 le jeune dieu」となったのである。これはアナトールが、「詩」の力のもと、理念化された存在として「再生」する瞬間であり、覚書のなかでも最も神的な光をはなっている場面のひとつである。マラルメの手によって、アナトールは、「死」という「闇」に勝利する、光り輝かしい「太陽」の英雄として描かれるのである。

しかしこの紙片で描かれているアナトールの理念的存在としての「再生」は、この覚書が作品として完成されなかったことによって、夢の断片となってしまったこともまた事実である。覚書の挫折と、アナトールの作品世界における「再生」については、このあとの第四章で取り上げたい。

本章では「太陽」の英雄には不可欠な「光と闇の闘い」のテーマでもって『アナトールの墓』を読んでみた。「太陽」の繰り広げる「光と闇の闘い」は、神話テキストとして、アナトールと「死」の闘いとして展開されていた。最終的にはアナトールは、「死」によって聖別されたまばゆい英雄として現れたのである。このように『アナトールの墓』は、「光と闇の闘い」のテーマで読み解くことができるのであり、そのテーマのなかでアナトールは神話的英雄として造形されているのである。

### 第三章「運命」

『アナトールの墓』には、「運命」（覚書で使用されているフランス語は、[destin] [destinée] [sort] [fatalité]）という言葉が繰り返し現れる<sup>(17)</sup>。マラルメはアナトールの夭折を「運命」として捉え、息子の「運命」を「自然の悲劇」の英雄「太陽」に見出そうとしていると思われるのである。

まずマラルメにとって「自然の悲劇」とは、「人間の運命」を表す自然の劇であるということは、フォンテーヌブローの森を輝かせて沈んでゆく秋の「太陽」を語った一八八六年の「ハムレット」論の言葉からも明らかである。

Loin de tout et du temps où se cherchent dans le trouble nos cites, la Nature, en automne, prepare son theatre, sublime et pur, attendant pour éclairer, dans la solitude, les significatifs prestiges, que l'unique œil lucide qui en puisse pénétrer le sens (ainsi qu'il est notoire que c'est **le destin de l'homme**), un Poète, soit rappelé à des plaisirs et à des travaux médiocres.<sup>(18)</sup>



すべてから遠く、我々の都市が混乱の中で自らを探し求めている時代からも遠く来て、〈自然〉は秋になると、おのが崇高で純粋な演劇を準備する。それは孤独の中で、意義深い名声を明らかにするため、その意味（それは周知のとおり人間の運命のことだが）を見抜きうる唯一無二の眼差し、すなわち〈詩人〉が、月並みな喜びや作品に呼び出されるのを待っていることである。

（強調著者）

もとより「自然の悲劇」の英雄である「太陽」とは、その特徴からして「運命」の観念を表しているものなのである。『古代の神々』では、オイディプスの悲劇は「太陽」の運行から次のように説明されている。

[...] Œdipe se montre comme dominé par une puissance à laquelle il ne peut pas résister. C'est que le Soleil ne peut se reposer dans sa marche: l'astre n'agit pas librement ; et il faut qu'il s'unisse le soir à l'Aurore, de qui il s'est séparé le matin. Cette notion, appliquée à des actions humaines, devint l'idée de la Nécessité, appelée par les Grecs Ananké, ou de la Destinée qu'ils nomment Moïra [...]<sup>(19)</sup>

[...] オイディプスは自分では抵抗できない力に支配されているのです。それは〈太陽〉がその歩みを止めることができないからなのです。太陽には自由な行動が許されていません。太陽は明け方に別れた〈暁〉と、夕方には交じり合わなければならないのです。この考えが人間の行動の世界に適応されると、〈必然性〉の観念や〈運命〉の観念となるのです。ギリシア人たちによってそれらは、アナンケーやモイラと呼ばれました [...]

ここまで示してきた引用文からも明らかなおと、マラルメにとって「太陽」の運行は、我々人間の「定め」、すなわち「人間の運命」そのものを表しているのである。紙片四、六一で見たように、マラルメが地平線に消えてゆく「太陽」に見ていたのも、アナトールの夭折という「運命」であった。「太陽」の運行のように、アナトールにとってもその早すぎる「死」はどうすることもできないものなのであった。

このようにマラルメは、アナトールを襲った八歳での死という「運命」を神話の唯一の英雄とされる「太陽」のなかに見出しているのである。『アナトールの墓』に「運命」という言葉が多く見られるのも、マラルメがアナトールの死を、そこに人間の「運命」が表されているとされるマラルメの神話学、すなわち「太陽」を中心とした「自然の悲劇」のテーマのもと理解しようとしていることが大きく影響していると言える。



ここで本論は、第二章で、アナトールが「死」と闘う神話的英雄として描かれていたように、マラルメがこの覚書のなかで「運命」という言葉を使って、アナトールを、神話の英雄たちのように厳しい「運命」を背負わされた者として語っていることに注目したい。マラルメは、「太陽」の英雄を表すのに相応しい「運命」という言葉でもって、アナトールを神話的主人公として造形し、この覚書を「太陽神話」として構築しようとしているように思われるのである。

まず、マラルメにとってアナトールの夭折の「運命」は、その死を予感した八月二二日のアンリ・ルージョン宛の書簡の「恐ろしいのは、私たちのことを除外しても、この小さな存在がもはやいなくなるという不幸それ自体なのです、それが彼の運命なのだとすれば」<sup>(20)</sup>という言葉から分かる通り、ただ絶望として現れた。アナトールの死が現実化した後に書かれたと思われる覚書のなかで、アナトールの悲劇的な「運命」は、先の引用にあるギリシア神話の「運命」の女神「モイラ Moire」の名のもと、次のように語られている。

(M27)

avant de faire ses classes)

ainsi c'est moi, Moire maudite – qui t'ai légué ! – <sup>(21)</sup>

彼が経験を積む前に)

かくして、呪われた運命の女神モイラ、私なのだ—お前に遺贈したのは！—

「モイラ Moire」とは『古代の神々』の説明によると、「命の糸を紡ぐクロトー、命の糸の長さを決めるラケシス、命の糸を断ち切る冷酷なる女神アトロポス」<sup>(22)</sup>からなる三姉妹である。アナトールの「運命」を掌った女神「モイラ Moire」は「呪われている maudite」と形容され、アナトールは夭折の不運を割り当てられた神話的英雄として語られている。マラルメはアナトールの「死」という不条理な「運命」に愕然としているのである。

このようにアナトールの不幸な「死」をマラルメは「運命」という言葉でもって語るが、これは丁度、第二章の神話的英雄の闘いのなかでアナトールが「死」によって命を奪われる場面に対応している。次に引用する紙片で語られている「運命」も、アナトールの英雄的死を語るのに用いられている。

(M113)

III

tombeau – fatalité

– père – « il devait mourir – »

mère ne veut pas qu'on parle ainsi de son fruit –

– et père revient à destinée accomplie en tant qu'enfant.<sup>(23)</sup>

III

墓—運命

—父—《彼は死ぬ定めにあった—》

母は自分の果実についてそのように言われるのを望まない

—そして父は子として完遂された運命に立ち戻る

この紙片でも「墓—運命」、「彼は死ぬ定めにあった」など、様々な言い方でアナトールの夭折を「運命」として語るマラルメの姿が見て取れる。ここで注目すべきは、Ⅲと打たれた三部構造（『アナトールの墓』は三部構造になることが計画されていた）の最終部に予定されるこの紙片には、アナトールの「再生」へのマラルメの意志が反映されていることである。

それはこの紙片の最後の「父は子として完遂された運命に立ち戻る」という表現から読み取れる。この表現には父が「完遂された運命」として息子の「死」を真正面から見すえ、その事実を出発点として新たな思考を展開しようとする意志が感じられる。マラルメはアナトールの夭折という「運命」を理念化の出発点として受け入れようとするのである。

このような理念化の出発点として捉えられたアナトールの死という「運命」は、次に引用する紙片で見るように大きな転換をむかえる。この紙片で現れる「運命」という言葉は、ここまでのアナトールの夭折という悲劇を語る「運命」とは大きく違って、アナトールの「再生」の意味で用いられているのである。

(M163)

Ah! cœur adorable

ô mon image là bas **des trop grands destins** – qu'enfant

comme toi – je rêve encore tout seul – – en l'avenir –<sup>(24)</sup>

ああ！ 愛すべき心

おお 私のイメージ 彼方にはあまりに偉大な運命がある—お前のような

子供が—私はたったひとりで夢みている— —未来において—

(強調著者)

この紙片で示されている「あまりに偉大な運命」とは、将来アナトールが理念化されるべきところの「作品」であることは間違いない。覚書のなかでは、マラルメが将来アナトールを理念化した「作品」を書くことを宣言する紙片は、いくつも見られるがこの紙片はその一つに該当する。複数形になっているのは紙片一四の「あまりに広大な計画 projets trop grands」と同じで、アナトールが理念化される「作品」が複数あることを予告している<sup>(25)</sup>。要するにここでマラルメは、アナトールが「再生」することになる「作品」までも「運命」と呼んでいるのであり、それはアナトールの栄光を讃えた「あまりに偉大な」ものだと言うのである。

このようにマラルメは、理念的存在としてアナトールが再生することを「運命」として捉えているのである。これは、第二章で見た、紙片七六、七七の神話的英雄アナトールが、死に打ち勝ち、「神」として再生する場面と対応していると言える。マラルメがアナトールを、夭折という「運命」を背負いつつも、その不幸から立ち上がり、理念化された存在として再生する「運命」を背負った英雄として描きだそうとしていることが、「運命」という言葉の現れる紙片、また第二章で取り上げた神話的英雄としての闘いを描いた紙片をつなぎあわせると理解できる。

死によって中断されたアナトールの「運命」の続きは、マラルメがエクリチュールによって創造しなければならないのである。神話の英雄たちが難行苦行の果てに死によって「神」となるように、幼い身でありながらも苦しんで死んでいったアナトールを「神」にするのは父の仕事である<sup>(26)</sup>。マラルメは、詩の力によって理念化される栄光の瞬間までが英雄アナトールの「運命」なのだと語っているのである。

本章で見てきた通り、まずマラルメは、「自然の悲劇」の英雄である「太陽」にアナトールの「運命」を見出していた。そしてマラルメはアナトールを、早すぎる「死」と、理念化された存在としての「再生」の「運命」を背負った神話的英雄として描きだすのである。アナトールが「太陽」の英雄に譬えられている以上、これはあたかも「死」から「再生」への「太陽」の軌道を描きだすようでもあり、マラルメはいつの日か「詩」によってアナトールが「太陽」のように「再生」するのを夢みているのである。

＊

最後の章に移る前に、ここまでの内容を振り返ってみよう。第一章では、神話的想像力のなか

でマラルメがアナトールを「太陽」の英雄として見ていることが分かった。第二章では「光と闇の闘い」を繰り広げる「太陽」の英雄に相応しく、アナトールを「死」との「闘い」を繰り広げる神話的英雄として描いていることが分かった。第三章においては、マラルメが、神話の唯一の英雄「太陽」のなかにアナトールの「運命」を見出し、アナトールを悲劇的な「死」からの「再生」の「運命」を背負った神話的英雄として語っていることが明らかにされた。

このように『アナトールの墓』は、アナトールが「太陽」に見立てられることで、さらに「太陽」の英雄が生み出す「光と闇の闘い」や「運命」のテーマのもと構築されることで「太陽神話」としての姿を現すのである。

#### 第四章「再生」

本論ですでに触れたようにマラルメは、必死の試みにもかかわらず『アナトールの墓』と呼ばれるこの覚書を完成させることはできなかった。娘ジュヌ・ヴィエーヴの証言にあるように、マラルメはアナトールの死について、「ユゴーは幸福にも（娘の死について）語ることができた。私にはそれができない。」<sup>(27)</sup>と語った。マラルメの悲しみはあまりに深かったというべきだろう、マラルメはアナトールの死後、長い沈黙の喪に入る。それでは、アナトールの「再生」は叶わなかったのだろうか。そうではない。アナトールの死と、それに際して書かれたこの覚書は、マラルメの創造の源泉となり、後のマラルメの文学の形成に大きな影響力を持ち続けてゆくのである。

本論の最終章では、アナトールがマラルメの後の作品世界で「再生」するところを目撃したい。アナトールの「再生」は、アナトールの死や、この覚書の影響が見られる作品のなかに見出せるはずである。特に『アナトールの墓』を「太陽神話」として語ってきた本論では、「太陽」の英雄としてのアナトールの「再生」を見たい。そこで注目したい登場人物は、マラルメの最晩年の作品『エロディアードの婚礼 Les Noces de Hérodiade』の聖ヨハネである。『婚礼』は未完の作品であるが、ガードナー・ディヴィスの読みおこしによって今日その全貌を知ることができる。『婚礼』はあまりに大きな作品なので本論ではその一端を示すにとどまるが、ヨハネのなかには明らかにアナトールの「再生」が読み取れるのである。

『婚礼』のヨハネは、アナトールと同じく、「太陽」に見立てられる。「太陽」であるヨハネは、エロディアードという「夜」と日没で交わるというというのが『婚礼』のプロットであり、ヨハネはマラルメの全詩篇のなかで、最も典型的な「太陽」の英雄と言える。そこで注目したいのが、「太陽」の英雄ヨハネの出現の場面に、紙片七六、七七において見た、アナトールが「死」によって聖別された「英雄」となって出現した場面の明らかな反響がみられることである。

それでは、紙片七六、七七の反響が見られるヨハネ出現の場面とはいかなるものか。ヨハネの出現が描かれる「前奏曲」の冒頭を引用しよう。

(『エロディアドの婚礼』『前奏曲 I』V1～V2)

Si.

Génuflexion comme à l'éblouissant

Nimbe là-bas très glorieux arrondissant<sup>(28)</sup>

もし

跪こうあたかも眩い

彼方の極めて栄光に輝いた光輪に

ヨハネとアナトールの「出現」には驚くべき一致がある。まずヨハネもアナトールも「死」によって個別的存在を捨て去り「純粹精神」となった存在として出現している。そして「死」によって聖別された「英雄」の前ではともに「跪く」<sup>(29)</sup>ほかないと歌われる。さらに二人とも「太陽」の英雄なのである。

紙片七六、七七は、アナトールが「神」として「再生」する、アナトールの理念化の象徴的場面であった。覚書は作品として完成されず挫折したが、夢みられたアナトールの理念化への意志は、『婚礼』の「太陽」の英雄ヨハネの造形に生かされたというべきである。引用した「前奏曲」の冒頭が「太陽」としてのヨハネ出現の場面であることを思えば、これは理念化したアナトールが「太陽」として「再生」した瞬間であったとも言える。マラルメは『婚礼』というその生涯の最も重要な作品の始まりに、アナトールのイメージを刻み込んでいるのである。マラルメの亡き息子への想いによって、アナトールは至高の人間精神の象徴であるヨハネのなかに永遠化されたのである。

最後に付け加えておくと、『アナトールの墓』と『婚礼』は、生者の最も美しい眼差しよりも強い「死者の眼差し」のテーマや、死者の魂を生者が吸収するという「霊的な婚姻」のテーマなどでも共通性を見出すことができる。これらのテーマからしても、アナトールとヨハネは本質を共有した存在だと言えるのである。『アナトールの墓』と『婚礼』との関係性の本格的な研究は今後の課題とし本論の結びとしたい。

〈註〉

(1) Bertrand Marchal « Anatole et « la tragédie de la nature » » Europe, 1998, pp204-211.

(2) DSMVI, p.494.

(3) DSM-VI, p.499.

(4) DSM-VI, p.494.

(5) マルシャルは、マラルメが一八六六年の危機以後、「自然」が「神」の代わりとなった例証として、「花々

Les fleurs.」の一八八七年の書き換えを挙げる。マラルメはそこで、キリスト教の神を連想させる「Notre Père」を「Notre dame」に書き直している。しかし「有神論」から「汎神論」、「父なる神」から「花なる神性」への転換だけでは、マラルメの「自然」の観念は捉えられないものと述べ「自然の悲劇」のテーマを持ち出している（« Anatole et « la tragédie de la nature » p.205）。

- (6) CC II, p.198.
- (7) Les Dieux antiques, p.15.
- (8) OC I, p.515. 使用したテキストはマルシャル編纂のものである。したがって紙片番号は、マルシャル編纂のものを付している。竹内信夫氏にならってこれを M と略記している。
- (9) OC I, p.524.
- (10) CC II, p.198.
- (11) CC II, p.207.
- (12) まずリシャールが名づけて以来『アナトールの墓』と呼ばれているこの覚書は、「闘い」が主題の候補のひとつであった可能性がある。その証拠として、紙片一一〇には、死んだアナトールの眼差しを閉ざし闇に埋葬する描写が続いたあとで、突然、「闘い、闘い lutte, lutte」という単語が並べられている。マルシャルは、二つ目の「闘い lutte」は、「題 titre」とも読むことができると指摘している。もしこれを「題」と読むとするならば、これらの覚書は、「アナトールの闘い」という「題」でまとめることができたのかもしれない。たとえ「題 titre」と読まなかったとしても、「闘い」のテーマがマラルメに取り憑いていることが、この紙片から見て取れる。本論において重要なのはアナトールが「太陽」の英雄に見立てられることで、この覚書が「太陽」の「光と闇の闘争」のなかにアナトールの劇が見出される、神話的テキストとして書かれていることである。
- (13) OC I, p.524.
- (14) Pour un Tombeau d'Anatole, p.66. (『アナトールの墓のために』 p.110)
- (15) 「純粹精神 l'esprit pur」とは、竹内信夫氏が解説しているように、マラルメの最重要概念とも呼ばれる人間精神に内在する「神性 la Divinité」のことである（『マラルメ全集 I 別冊・註解』 p.596）。
- (16) OC I, p.525.
- (17) 「運命」という言葉は紙片番号で言えば、M47, M99, M163, M113, M201に現れる。また「運命の女神モイラ」が本文に引用した通り M27に登場する。本論で取り上げた以外の「運命」という言葉は、断片的であるため解釈するのは困難であるが、紙片四六、四七の「私はお前が男ならば、自らの運命を知らないことを望まない」には、アナトールが一人の男として、主体性をもって自らの「運命」を知ることが望むマラルメの姿を読み取れる。紙片二〇一の「子供 運命 大地は慰めにそう語る」には、マラルメが「自然」のなかにアナトールの「運命」を見究めようとしていることが読み取れる。
- (18) OC II, p.166.
- (19) Les Dieux antiques, p.175.
- (20) CC II, p.198.
- (21) OC I, p.519.
- (22) Les Dieux antiques, p.176.
- (23) OC I, p.531.
- (24) OC I, p.539.
- (25) マラルメはアナトールが亡くなる直前に投函された書簡の中で、「この子は魅力的で可愛らしいので、私の心を離さないのです。それゆえ、彼はすでに私の未来のすべての計画 [tous mes projets d'avenir]、最も慣れ親しんできた夢 [mes plus chers rêves] と溶け合っているのです」（強調著者）と語り、アナトールの未来はマラルメの将来書かれるべき作品にあるのだと予言していた。ここで語られているアナトールが理念化されるべき「作品」も、やはり複数形で表記されている。（一八七九年一〇月六日ジョン・ペイン宛書簡）（CC

## 太陽の子アナトール

II, p.201.)

- (26) 紙片一五八には、「父は犠牲を払い—そして神性化する divinise」とある。このように父が亡くなった子を「神 le dieu」にする場面は、本論で取り上げた紙片七六、七七にも描かれていた。覚書に見られる「神 le dieu」とは、「純粹精神」と同じで、マラルメにとっては人間精神の理念化された姿、すなわち「自己 Soi」=「神性 la Divinité」のことである。
- (27) Pour un Tombeau d'Anatole, p.26. (『アナトールの墓のために』 p.40) (N.R.F, 1<sup>er</sup> décembre 1926, p.521.)
- (28) OC I, p.147.
- (29) 亡き息子に「跪拜」を捧げる場面は、M12, M13にも見られる。

### 〈主要参考文献〉

#### テキスト・書簡（註も含む）

- Stéphane Mallarmé: Œuvres complètes, I, édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Coll. «Bibliothèque de la pléiade», Gallimard 1998 (OC. I と略記)
- Stéphane Mallarmé: Œuvres complètes, II, édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Coll. «Bibliothèque de la pléiade», Gallimard 2003 (OC. II と略記)
- Stéphane Mallarmé: Correspondance II recueillie, classée et annotée par Henri Mondor et Lloyd James Austin Gallimard 1965 (CC II と略記)
- Stéphane Mallarmé: Documents VI présentés par Carl Paul Barbier Nizet 1977 (DSM-VI と略記)
- Stéphane Mallarmé: Les Dieux antiques Nouvelle Mythologie d'après George, W.Cox, Gallimard 15<sup>e</sup> édition, 1925 (Les Dieux antiques と略記)
- 『マラルメ全集Ⅰ 詩・イジチュール』 筑摩書房 2010
- 『マラルメ全集Ⅱ ディヴァガシオン他』 筑摩書房 1989
- 『マラルメ全集Ⅲ 言語・書物・最新流行』 筑摩書房 1998
- 『マラルメ全集Ⅳ 書簡Ⅰ』 筑摩書房 1991
- 『マラルメ全集Ⅴ 書簡Ⅱ』 筑摩書房 2001

#### マラルメの研究書

- Stéphane Mallarmé, Pour un Tombeau d'Anatole, introduction de Jean Pierre Richard, Édition du Seuil, 1961
- Bertrand Marchal « Anatole et « la tragédie de la nature » » Europe, 1998, pp204-211
- Bertrand Marchal: Lecture de Mallarmé, Corti, 1985
- Bertrand Marchal: La Religion de Mallarmé, Archéologie, anthropologie, utopie, Thèse de doctrat, Université de la Sorbonne Nouvelle. Corti, 1988
- Jean Pierre Richard: L'univers imaginaire de Mallarmé, Éditions du Seuil, 1961
- Nobuo Takeuchi: «De la notion de divinité chez Mallarmé — Un essai d'approche de la pensée mallarméenne», Études de Langue et Littérature Françaises n. 32 Tokyo, 1978, pp46-77
- ステファヌ・マラルメ ジャン＝ピエール・リシャール『アナトールの墓のために』 水声社2015（原大地訳）
- ジャン＝リュック・ステンメツ『マラルメ伝—絶対と日々』（柏倉康夫・永倉千夏子・宮崎克祐訳） 筑摩書房 2004
- ジャン＝ピエール・リシャール『マラルメの想像的宇宙』（田中成和訳） 水声社 2004
- ギィ・ミシヨ『ステファヌ・マラルメ』（田中成和訳） 水声社 1993
- 大出敦編集『マラルメの現在』 水声社 2013
- 中畑寛之『世紀末の白い爆弾』 水声社 2009
- 佐々木滋子『祝祭としての文学』 水声社 2011



原大地『マラルメ 不在の懐胎』慶應義塾大学出版会 2014  
柏倉康夫『生成するマラルメ』青土社 2005